

- 1 無視をして凍鶴だけがついて来て
- 2 歩道橋の数を数えていた若葉
- 3 春の空半分は本気だったんだ
- 4 金木犀耳をすましていたんだろう
- 5 七月とギターを弾いている老婆
- 6 出来るだけ蜜柑の転びますように
- 7 菜の花のようにそして手を振ったよ
- 8 領けば銀杏並木のことである
- 9 柿の実やある日の征夷大將軍
- 10 雨の日は葉桜のこと考える
- 11 わがままで金魚のようなことを言う
- 12 指さして笑った桜の位置だった
- 13 ナポレオンのように落葉を掃いている
- 14 晴れた日に降る雪のようになかない
- 15 背中から突然天の川になる
- 16 一粒の天道虫がありました
- 17 外套の重さみたいなことだった
- 18 そうやって僕はあんたの花だって
- 19 メリーゴーランドすなはち春の嵐なり
- 20 春の日の太陽知らない人に会う
- 21 表通りの顔をして九月ですか
- 22 音たてず砂のこぼれる薄暑なり
- 23 山犬の吐く息を見る生きている
- 24 日焼けしたところから夕暮れてゆく
- 25 小鳥来るタバコ屋さんのようである
- 26 ガラス玉のように笑った十二月
- 27 青田風はじめて通る人だった
- 28 桜咲くいつか誰かが植えたので
- 29 明智さんあの蜥蜴泣いてますよ
- 30 一日の半分さくらでありぬ
- 31 水が落ちるので四月という解釈
- 32 ドーナツという悲しさを行く晩夏
- 33 冬の空光が止まらなくなった
- 34 夕立のようなやさしさを抱える
- 35 金木犀のやうなお菓子を食べませう
- 36 夏野とは返事が来ないことを言う
- 37 落ちそうになった氷水みたいに
- 38 冬であるためには少しコツがいる
- 39 電車を降りた時から五月だった
- 40 ためらいもなく臍となっている
- 41 自画像の背景にある薊かな
- 42 青空を金木犀は倒れけり
- 43 たんぽぽは掴んで離さない帽子
- 44 結ぼうとすればほどけてゆく銀河
- 45 この桜ひどく触れたがるから
- 46 揚羽蝶空は繋がってるんだろう
- 47 もう一度だけ白鳥になる真昼
- 48 能面は夏野に紛れ込んだまま
- 49 街路樹の若葉のように死んでいる
- 50 春の海横着な顔をしていた

75 このごろはもう咲くことはない野ばら  
 74 鶏の後ろをついて行けば冬  
 73 冬の空きれいなままのポケットで  
 72 音がして春が置かれていたんです  
 71 約束は花火のように残った  
 70 凍蝶もいたから手を振れなかったの  
 69 夏木立猫を三匹飼っている  
 68 三月の赤い車は並びけり  
 67 許そうとしない烏瓜笑った  
 66 ブランコを漕げぬ少年空を見る  
 65 蜜柑とか裁判官の匂いとか  
 64 夕立に触れたらこわれそうだった  
 63 薄氷は空を埋めるといふ作業  
 62 冬空のように笑っている子かな  
 61 夏雲や只今好評分譲中  
 60 春の水見ていたら影が落ちた  
 59 鼻をふくらますとき涙なり  
 58 木犀はやがてかたかた鳴るだろう  
 57 春風という無関心君がいる  
 56 凍えつつ灯るランプのようだった  
 55 確かめるようになかなかかなと言う  
 54 十一月声をそろえて言いました  
 53 このように銀河は星の集まりで  
 52 秋の夜正しさを鏡に映す  
 51 咳をする思い出を落としてしまった

76 大根のにおいしばらく嘘である  
 77 夕立が来る日の肌の熱さかな  
 78 靴下を履いている三日月である  
 79 真つ青な雨傘さして老婆なり  
 80 冬銀河まだ音楽が足りないよ  
 81 水のないプール両目を閉じている  
 82 春空は呆れるくらい頑丈で  
 83 鳴り終わるまで待っていた芒原  
 84 陽炎をたたんでしまいこんでいる  
 85 晴れている夏がいびつであるように  
 86 そう言ってまた悲しくなるきつね  
 87 木の椅子を置けばたちまち月となり  
 88 あやとりの終わりを待っていると  
 89 蝉時雨横断歩道を渡り切る  
 90 黒うさぎかすかな光のことでしょう  
 91 マフラーがずり落ちるので泣いている  
 92 片言の傍ら金木犀である  
 93 桜とはエゴン・シーレの絵のようで  
 94 風花の一枚だけを持っている  
 95 トマトまで転がっていて孤独  
 96 晩夏光ときどき不謹慎だった  
 97 花氷外はかならず晴れている  
 98 とかげのように青空を引きずって  
 99 勇敢に降る雪ミルクチョコレート  
 100 肩が触れていた銀河鉄道の夜